「地域の未来を拓く子供を育てるために
～地域全体で子供とどう関わるか～」

社会がますます複雑多様化し、少子化や核家族化、また地域における連帯感や人間関係の希薄化が進む等、子供を取り巻く環境が大きく変化する中、地域社会や家庭における教育力の低下がいっそう懸念されています。

子供が「社会に適応する力」のみならず「共によりよい社会をつくる力」をもち、地域と関わりをもつことは、地域全体の活力を育むだけでなく、未来の地域社会を担う人材の育成につながり、持続可能な地域社会の実現を可能とします。また、子供の主体的な地域活動への参画意識の向上は、一生涯、ふるさとを愛する心の基盤となるものです。

和歌山県社会教育委員会議では、「子供の情報を地域全体で共有し育てる仕組づくり」、「子供が主体的に地域活動に参画する具体的なしかけづくり」、「地域の中で学校が果たしてきた役割の再検証」を主たる観点として議論を深め、地域の未来を拓く子供を育てるために、社会教育活動の今後の方向性や具体的方策等について協議した内容をリーフレットにまとめました。

- 【事例紹介①】IBW美容専門学校　副校長　山本　理恵　氏
  「地域で取り組むキャリア教育　－キャリア教育を担うのは誰か－」
- 【事例紹介②】特定非営利活動法人　暮らしづくりネットワーク北芝　松村　幸裕子　氏
  「子供・若者の地域参画　～暮らしづくりネットワーク北芝の事例より～」
- 【事例紹介③】那智勝浦町立市野々小学校　校長　山本　健策　氏
  「学びをつなぐ　～子供たち自身が次世代へつなぐ主人公～」
- 議論を踏まえた方向性
- 和歌山県社会教育委員会議の教育行政への提言

平成28年8月

和歌山県社会教育委員会議

ＩＢＷ美容専門学校副校長　山本　理恵　氏

「地域で取り組むキャリア教育　－キャリア教育を担うのは誰か－」

事例紹介

全ての子供が未来に希望をもてる社会であり、どのような環境に生まれようとも、どのような困難が目の前に訪れようとも、もがきながら乗り越え、将来への希望をもてる社会であってほしい。そうした思いから、「未来スクール2014」を開催した。これは、大人が自分の職業をもとに、働くことの意義を子供に楽しく伝える事で、子供たちの社会を生き抜く力を育むまちの学校である。

子供の中には未来に希望をもてない子が多い。「どうせ僕は無理」「何になりたいかわからない、勉強する意欲がわかない」「和歌山には何もない」こうした子供の声を聞く中で、「ほっとけない」という気持ちになり、キャリア教育の大切さを感じるようになった。

そこで、キャリア教育を「社会の中で生き抜く力を身につける教育」「激しい時代の変化に対応する力を身につける教育」と定義づけ、大人が生き生きと仕事をし、暮らしている姿を子供に見せることにより、子供の将来への希望や意欲を引き出すことができると考えた。その実現のためには、働くことの意義を伝える地域の大人の存在が必要となる。地域の大人が教育者という立場ではなくても、働く大人、町で暮らす大人としてキャリア教育に取り組むことが大切である。更に、地域の中で、キャリア教育コーディネーターを育成し、学校教育と連携しながら、この取組を進めていきたい。

子供が未来に希望をもつために ～委員からの意見～

地域の大人が地域の子供に関わっていけることが普通になれば良い。そのためには、すべての大人が共に議論し、取り組んでいくことが必要である。

子供が学校を中途退学する理由には、目的意識がないことや経済的な事情が大きな要因となっている。頑張りたくても頑張れない子供に対し、どのような支援をするのかという問題意識をしっかり持たなくてはいけない。

地域には、様々な分野でのコーディネーターがそれぞれの役割を担っている。今後は、地域で活躍するコーディネーターを統括していく必要がある。

かつて子供は、社会の中や自然の中で大人の背中を見て育ってきたが、今は意図的にしかけを作らなければならない。

高校を卒業すると、若者の多くは首都圏や京阪神に進学や就職をし、地元に戻ってこないことが多い。特に郡部ではそれが顕著に表れている。この大きな要因は就労に起因するものである。

若者は、仕事があるまちに帰ってくるのではなく、魅力のあるまちに帰ってくる。魅力のあるまちを作ることで戻ってくる。

特定非営利活動法人　暮らしづくりネットワーク北芝　松村　幸裕子　氏

「子供・若者の地域参画　～暮らしづくりネットワーク北芝の事例より～」

事例紹介

「北芝」は、地域住民の「この地域を人が人としてあたりまえに生きていけるまちにしたい」という熱い思いがひとつになって、地域の課題解決をめざし、子供から高齢者まで多世代によるまちづくりを進めてきた。その思いを実現するため、2001年に特定非営利活動法人「暮らしづくりネットワーク北芝」が設立された。

「暮らしづくりネットワーク北芝」は、様々な課題を有する子供や若者に目を向け、居場所づくり、社会体験の充実、学び直しサポートの３つの柱で事業を展開している。

居場所づくりでは、不登校の子供、休日に行く場所がない子供、親とのふれあいが少ない子供が安心して過ごせる居場所を提供している。

社会体験の充実では、子供がボランティア活動や地域の行事に参加することで得られる地域通貨「まーぶ」の取組を実施している。この「まーぶ」は、誰かのためになること、自分の未来のために何かを学ぶことで稼げるようになっている。

学び直しサポートでは、小中学校と連携し、不登校や学力の問題について週に１回の連携会議を実施している。また、高校生に対しては、中途退学率が高いため高卒認定試験に対応できるよう勉強会を実施している。

今は、どの取組も大人主導で行われているが、今後、子供主体の取組に大人が巻き込まれるという形をめざし、大人が子供の夢を叶えるために奔走している姿を見せていきたい。

子供の多様な居場所づくりのために　～委員からの意見～

- 自己決定し、自ら課題解決できるためには、自己選択ができる力を身につけることが必要だ。現状として、大人が子供に方向を示していることが多い。子供自身が多くの選択肢をもち、決定できる仕組みを作っていかなければいけない。

- 子供の学力低下、自尊感情の低さ、複雑な家庭の状況等はどの地域でも見られることであるが、こうした状況に教育行政としてどのように取り組んでいくかが課題である。

- 生活の基盤が確立しないと学力の向上につながらないと感じる。そのためには、学校だけでなく地域の力が必要である。

- 支援が必要な子供や若者には、安心できる居場所が必要である。居場所での活動から地域参画へとつながるプロセスを考える視点をもたなければいけない。

- 子供の自尊感情を育むためには、周りの大人の働きかけが大きく影響すると考える。たくさんの成功体験を通して、大人から誉めてもらうことにより自尊感情は高まっていくものである。

那智勝浦町立市野々小学校　校長　山本　健策　氏

「学びをつなぐ　～子供たち自身が次世代へつなぐ主人公～」

伝統や文化について学び、学んだことを次の世代に伝えていくこと、情報を発信していくことが大切

事例紹介

平成23年９月に発生した紀伊半島大水害により、地域も学校も甚大な被害を受けた。復興作業も進み、近隣の小学校を間借りしての学校生活から復帰した頃、「子供の姿を見ることで元気になった」という声が地域から聞こえてきた。「子供が元気になれば地域も元気になる」との思いのもと、子供に郷土に対する誇りと自信をもたせることを目標に、ふるさと学習をはじめた。

地域の伝統や文化を学習する中で、「受け継いできたものを守り、育てることの大切さと、次世代へ伝えていくことの必要性」について子供も教師も学ぶことができた。そして同時に、郷土に対する感謝の気持ちが芽生えてきたのが見えた。

こうした学校の活動や様子を地域に発信することで、学校も地域と新たなつながりをもつことができた。また、これらの情報を共有することが地域の活力の一つになることも確認できた。

少子高齢化と人口減少という今日的課題に加え、災害の傷をどう癒すかという地域の課題に対し、私たちが、主体的に考え向き合っていくためには、問題に対し、具体的なテーマを設定し、解決のための仕組みづくりをすることが大切であり、設定したテーマを発信するためには、体験したこと、学んだことを整理・可視化することも必要であることがわかった。

社会教育は、「人々が共同生活するための組織の教育」、「仲間としての教育」、「世の中の教育」と考える。今後も、地域の様々な方と出会い、多くの意見を聞くことで、地域の力を学校に取り入れることによって、学校の教育力を高めていきたい。

地域への誇りや愛着を深めるために ～委員からの意見～

地域学習をする意味を考えた時、地域から学校教育にもたらしてくれるものの大きさを教職員も体感している。地域の課題を正しくとらえ、教育課程の中で時間の確保をしていかなければいけない。

少子化が加速度的に進み、学校の存続が難しくなり、統廃合を迫られている現状がある。学校の統廃合を進めると、子供と地域の距離が広がっていく。子供が地域を元気にするという観点では、小規模校のメリットを最大限に活かしていく方法を考えていくことが必要である。

かつては、地域の祭りに合わせて学校を休みにしていたが、今では子供が参加することが難しくなってきている。こうした状況の中、どのようにして学校と地域が連携し、地域の伝統や文化を継承していくかが課題である。

学校が門戸を開かないということは従来から言われてきた課題であるが、きのくに共育コミュニティ事業の展開により教職員の意識は変わった。地域から発信されることも見えるようになり、教育効果も感じられるようになった。

子供が学校や地域で何をしたいのかという視点が必要である。子供には子供として果たせる役割がある。大人が思っている以上に子供には可能性があり、自由な発想を妨げないことが大切である。

議論を踏まえた方向性

学校・家庭・地域が連携・協働する

子供の進路をめぐる環境が大きく変化する中、自分の進むべき道を決定することが難しくなってきている。生まれ育った郷土に誇りがもてなかったり、自分の将来をイメージできなかったりする子供がいる。そうした子供に、地域の中で大人が輝いている姿を見せることが、子供の夢や希望につながるのではないか。将来子供が自立していくために必要な意欲や態度、能力を育む教育は、学校だけではなく地域社会でも取り組まなければならない。そのためには、様々な大人が子供に関わり、夢や希望を語れる機会をつくることが必要である。

社会全体で子供を守り、育てる

子供が意欲や希望を失い、夢がかなわないと思う社会であってはならない。様々な困難を有する子供に対し、社会教育としてできることを考えていく必要がある。そのためには、子供がどのようなことに気づき、学び、未来への価値を感じているのかについて、大人が関心をもたなければいけない。地域全体で子供を育てるためには、企業、ＮＰＯ、各種団体等が連携し、子供にとって安心できる居場所をつくり、そこから地域社会に参画できる仕組みを整備することが必要である。

故郷への愛着や誇りを育む

地域の中の学校ということを考えた時、積極的に地域の教育資源を活用することが大切である。子供は、生まれ育った地域について関心をもち、地域の大人から伝統文化や芸術について学ぶことにより、多くの感動体験を重ね、感受性豊かな人間として成長していくものである。地域のすばらしさに気づき、ふるさとへの愛着を高め、郷土を誇りに思う態度や地域への帰属意識の育成へとつなげていくためには、地域の大人の協力を得て、協同学習を推進していく必要がある。

和歌山県社会教育委員会議の教育行政への提言

「地域の未来を拓く子供を育てるために ～地域全体で子供とどう関わるか～」

学校・家庭・地域の連携・協働のために

- 学校・家庭・地域が連携協力し、子供と大人が共に育ち合う仕組みとなる「きのくに共育コミュニティ」の取組を一層充実・発展させる。
- 各分野で活躍するコーディネーターをまとめる役割を担う統括コーディネーターを養成する。
- より多くの地域住民が参画することにより、地域全体で未来を担う子供の成長を支えていく「地域学校協働活動」の取組が、継続的な活動となるよう積極的に支援する。

社会全体で子供を守り、育てるために

- 様々な課題を抱えた子供を支援するための「居場所づくり」を推進する。
- 企業、ＮＰＯ、福祉機関など様々な専門知識・能力をもった関係機関等との連携を強化する。
- 保護者が安心して主体的な家庭教育を進めるよう、学習機会や情報の提供、様々な相談への対応等、家庭教育支援の取組を充実させる。

故郷への愛着や誇りを育むために

- 地域住民のつながりを深め、学校を核とした協働の取組を通して、地域づくりを推進する。
- 地域における歴史や文化の伝承等に子供が主体的に関わる取組を推進する。
- 子供が地域課題の解決に向けて積極的に貢献できるよう、学校と地域の双方向の関係づくりを円滑に進める。

和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課

〒640－8585　和歌山市小松原通一丁目１番地

TEL ０７３－４４１－３７２０